

特集① トラスト地とその周辺の自然環境

トラスト地の鳥類調査 (越冬期)

大塚 隆廣・堀井 達夫

(トトロのふるさと財団 調査委員会)

はじめに

2009年12月現在、トトロのふるさと財団が所有するトラスト地は1号地から10号地までの10ヶ所であるが、地勢は雑木林や竹林、そして荒廃地とさまざまである。そこに依存して生きる鳥類はどのような種がどのくらい棲んでいるのか、上記10ヶ所に財団の活動拠点「クロスケの家」、県より管理運営を受託している「埼玉県狭山丘陵いきものふれあいの里センター」の2ヶ所を加えた12ヶ所について、鳥類調査を行なった。

調査方法

調査期間を鳥の越冬期の12月とし(3号地のみ11月26日)、比較的に活動の活発な午前8時からの1時間とした。双眼鏡を使用し、視認と鳴き声(地鳴き、さえざりなど)をトラスト地にて定点調査を行なった。数は重複カウントをしないように注意しながら記録した。

鳥の種毎の出現頻度と優占度は以下の式で算出した。

$$\text{出現頻度 (\%)} = \frac{\text{その種の出現した調査地数}}{\text{全調査地数}} \times 100$$

$$\text{優占度 (\%)} = \frac{\text{その種ののべ個体数}}{\text{全種ののべ個体数}} \times 100$$

調査結果と考察

結果は表1の通り、6目20科33種、2番外種だった。

1. この時期に見られる冬鳥のルリビタキ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、カシラダカ、アオジ、ウソが出現している。
2. 出現頻度100%は、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの3種。次に冬鳥のアオジ、ジョウビタキ、ツグミが上位に続き、シジュウカラも83%と観察機会が多い。逆に出現頻度の少ない種は、やはり水辺に依存するカワウやカモ類、キセキレイ、ハクセキレイなどと、猛禽類のオオタカ、ハイタカ、ノスリ、ハヤブサだった。良く見られる筈のカシラダカとスズメがいずれも一箇所だけの出現は少し意外な感じもするが、群れで生活する種なので、観察時間に依っては多くなると思われる。3号地のミソサザイは、いかにも環境に合った生活をしている感じがする。
3. 優占度の高いのはヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスで出現頻度と同じのは当然であるがこの3種で60%を占めている。特にヒヨドリはこの時期でも32%と、数の多いことが分かる。上位3種に続くのがアオジとツグミでこの時期の鳥相が分かる。
4. 各地別に見た時、15種と最も多かったのは9号地であるが、他の地に比べて多様な環境が存在する証と思われる。オオタカとハヤブサの出たのも9号地である。その他は、9種から14

